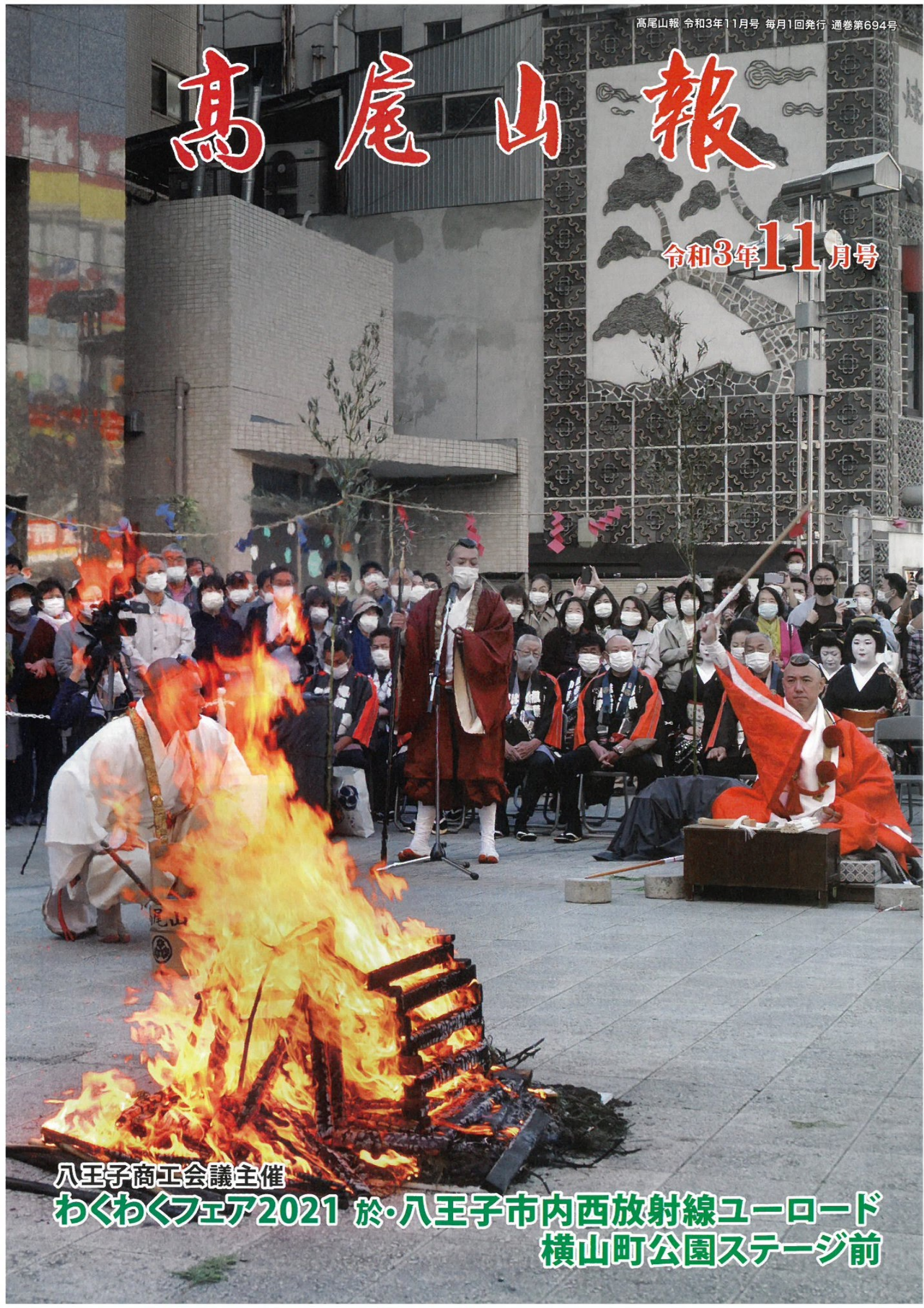


# 高尾山報

令和3年11月号



八王子商工会議主催

わくわくフェア2021 於・八王子市内西放射線ユーロード  
横山町公園ステージ前

# 法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(113)

秋が深まり、冷え込  
みが一段と厳しくなっ  
てきました。身近な木々  
もすっかり赤や黄色に色  
づいて、気づけば季節は  
「梢の秋」(秋の末)の装  
いです。「花は里より吹  
き初め、紅葉は山より  
染め初むる」と言われる  
ように、春の桜の山登り  
とは反対に、紅葉が山  
頂から里のほうへと下っ  
てきたようです。

## 秋の露

いろいろなことに

置けばこそ

山の木の葉の

千種なるらめ

〔古今集〕よみ人しらす  
(秋の露が色とりどりに  
置くからこそ、山の木の葉  
は種々様々なのだなあ)  
優美に綾なす紅葉は、  
いったい何が染め上げて  
いるのでしょうか。現代で  
あれば、昼と夜との寒暖

差や太陽光、適度な湿  
度や水分による……とな  
るのでしようが、この「秋  
の露」の歌では、さまざま  
な色の露によって染め  
られたと詠っています。  
「紅葉に置けば紅の露」  
(秋を感じる白い露も紅  
葉の上に宿ると赤く見え  
る)という捉え方もある  
一方で、錦のようにきら  
めく露が、葉っぱを見事  
に色づかせていると感じ  
られてもいたのです。

## 色千種に

見えつるは

散ればなりけり

〔古今集〕よみ人しらす  
(吹き渡る風の色がとり  
どりに見えるのは、秋の木  
の葉が散るからなのだ)  
秋の紅葉は、落葉に先  
立って起こるものです。  
やがて初冬に吹き荒れる

## 折り折りの記 (147)

波多野 重雄

### 維新見ず龍馬は惨死十一月

龍馬は寺田屋事件でお龍さんの奇智に命拾いして以降、定宿は京都河原町の近江屋とした。  
慶応三年十一月十五日夜、午後七時頃、宿に中岡慎太郎と会談中、二人の刺客に襲われた。龍馬は奥の床の間の刀を取ろうとした背中から斬られ、刀を抜く間なく前頭部を斬られた。中岡も両手両足を斬られる。  
龍馬と中岡の死は討幕派に大きな衝撃を与えた。維新の足音が聞こゆる時、誠に無念、龍馬の心中察して余りある。三条実美は寝食を忘れ慟哭した。  
(高尾山健康登山の会会長)

## 十八本山参籠(5)

### 冬参籠

#### 総本山智積院

常緑松葉映青天

早晨修行承護摩

熊蟬喧噪静消滅

布施貍下笑顔

厚木市 荒井 一雄  
芭蕉忌や  
蒟蒻膳に  
舌鼓

冬、総本山智積院に参籠る

常緑の松葉は晴天に映す…

早朝の勤行に

御護摩修行を承く…

(夏の)熊蟬の騒声、静、消滅…

(総本山智積院様)

化主布施貍下の笑顔は和む…

木枯らしによって、秋色の景色も一気に払い落とされるでしょう。彩られた紅葉が風に舞うのは、晩秋ならではの艶やかな光景です。

梢の葉が、季節とともに若葉から青葉、紅葉から落葉へと姿を変えていくように、人間の一生もまた同じように移り変わっていきます。人の営みは、一瞬たりとも留まりません。悉達太子(お釈迦様)が「世間の法は、一人死す、一人生れぬ、永く副ふこと有らむや」(この世の定めは、一人が死ねば、一方では一人が生まれば、永遠に付き添うものはない)と説かれたように(『今昔物語集』)、私たちが生きる「無常の世」(至るものが生まれたり滅びたりして変化し続ける世の中)において、儻々からは決して逃れられません。  
こうした「無常」に対して「常住」という仏教語があります。あまり聞き慣れない言葉かもしれま



秋が深まり境内の木々も色付いてくる

せぬが、「常住」は「永遠不変」の意味で、私たちが住まう世(俗世)とは違つた、仏さまの「悟りの世界そのもの」(浄土)でもあります。仏教では、こうした悟りに至るための教えや修行方法を「仏道」(法の道)と称しています。  
仏道は「まことの道」「真・誠・実」の道とも呼ばれます。「人として

わしさを避け、山紫水明の自然の中での悠々自適な生活を求めました。流水を友とし、竹を師と仰ぎながら、自然の営みの中に「善知識」(仏道へと導く機縁)という「真の友」を見出していたのでしよう。  
さとりゆく  
まことの道に  
入りぬれば  
恋しかるべき  
故郷もなし  
(『新古今集』慈円)

(私は真実に辿り着く道に入ったので、恋しいはずの故郷もない)  
「まことの道」の終点には、仏さまの故郷があるのでしょうか。白楽天のような隠遁生活(世俗を逃れ、山奥に隠れ住むこと)とまではいなくても、自然の清らかな鏡(お手本)で自分を照らせば、キラキラと錦織りなす「まことの道」が見つかるような気がします。  
(栃木北部教区普濟寺)

## 七五三身上安全祈願



「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願ひ、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月、十一月の間山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈禱」を受け付けております。どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

ここに登場する中国の詩人、白楽天(七七二〜八四六)は、俗世間の煩

近づくべきです。  
(『沙石集』)



ユーロードを練り歩く「桑都八王子パレード」



八王子商工会議所の榎崎会頭

十月二十三日、八王子商工会議所（榎崎博会頭）が主催する秋の恒例行事「わくわくフェア2021」が開催されました。

本年の開催テーマは、昨年八王子市が日本遺産に認定されたことを記念し、桑都八王子の「歴史と文化の魅力を感じて一日」でした。

開催にあたり、佐藤山主をはじめとした高尾山の僧侶が、八王子消防記念会や、八王子芸妓組合の皆様と共に西放射線ユーロードを練り歩く「桑都八王子パレード」に参加され、パレードの後には横山町公園ステージ前で、柴燈大護摩供を厳修致しました。

今回は八王子の中心市街地で行われた初めての柴燈大護摩供となり、ご参列の皆様と共に、市民の安全や、地域の興隆、新型コロナウイルス感染症の終息をご祈念申し上げます。

柴燈大護摩供の後は、八王子芸妓衆による見事な「桑都の舞」が披露され、道行く多くの人々の眼を引き付けておりました。

桑都八王子の文化と魅力も体験  
 わくわくフェア2021  
 十月二十三日（土） 主催・八王子商工会議所



市街地で初めて行われた柴燈大護摩供



八王子芸妓衆による「桑都の舞」



稚児装束に身を包む横川幼稚園の園児たち



健やかな成長を願いお加持を授かる



一年を共にした舞扇をご供養のためお預けする八王子芸妓組合の皆様



大本堂で御詠歌を奉詠

高尾山秋季大祭奉修  
 十月十七日（日）



佐藤山主と記念撮影を行う高尾山慶賛会の皆様

山容整備事業達成記念  
 昭和五十三年十月

# 観音菩薩の宗教

(47)

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

## 観音菩薩の転生者としての聖徳太子 (その10)

前号に見たように聖徳太子の由緒に関する伝承は複合的である。あらためて、これまで見てきたことを要略してみよう。

『古事記』や『日本書紀』によれば、聖徳太子は遺伝的には用明天皇を父に持つ天皇家の血筋を引き、神話的には天照大神に遡る背景を有する。また、聖徳太子は出家こそしなかったが、日本に伝わった仏教を最初に正しく理解し根付かせた人物であり、篤く観音菩薩を信仰していたとされる。太子の仏教理解は『天壽国續帳』や『上宮聖徳法王帝説』の伝える「世間虚仮 唯仏是真」(この世は仮のものであり、仏

のみが真実である)などの太子の言葉や、太子の述作とされる『法華義疏』から読み取ることができ、さらには、法隆寺の救世観音などの造形からも太子の観音信仰が浮かび上がる。こうした太子の仏教との深い結びつきを背景として、平安時代より、太子は観音菩薩の権化、生まれ変わりとあるとする思想が生まれてきた。

『古事記』の神道的・神話的世界観を保ったまま太子を観音菩薩の権化とする思想は、神仏習合の現れである。宗教学の用語に従えばシンクレティズム、複数の宗教の融合といえる。平安期の『聖徳太子傳』や江戸・寛永期の『聖徳太子伝』は、観音菩薩の権化たる後世の太子信仰に主眼を置きつつも、『古事記』などの伝統的系譜をも踏まえている。それらは文献に現れた神仏習合である。

『古事記』や『日本書紀』の太子を伝統的とするれば、外来の飛鳥仏教は革新的であった。丁未の乱(物部合戦)に勝利して排仏派との対立を収めたのち、崇仏派の太子は神仏を平和的に共存させ、さらに両者を融合して次世代の日本の伝統を形成していった。『日本書紀』用明天皇の条に「天皇信佛法、尊神道(天皇は佛法を信じ、神道を尊んだ)」とあるのはそのことを表している。「私のほかに神があつてはならない」(『旧約聖書』「モーセの十戒」)とするユダヤ・キリスト教などの一神教では異宗教との融合は困難であるが、聖徳太子

やその父・用明天皇は、両者を平和的に共存させる道を探った。後世の太子信仰においても、神の未裔たる太子は同時に観音菩薩の権化とされ、一層、神仏は深く結びついていった。こうしたことを念頭に、本題からは横道にそれるが、今号ではモンゴルにも類似の思想・歴史観の展開があつたことを見てみたい。モンゴルは地球上で最北の仏教文化圏に属するとともに、仏教が弘まる以前からシャマニズムと呼ばれる自然崇拜を機軸とする呪術・宗教があつた。いたずらに日本とモンゴルを比較するのは避けねばならないが、モンゴルの宗教事情は日本のそれと似た性格を有する。筆者辱知の故・ロプサンジャブ氏(モンゴル国立大学教授)は、モンゴルにおけるシャマニズムと仏教との共存・融合は日本の宗教事情と同様だと主張されてい

た。いわばモンゴルにおける「神仏習合」である。本稿では、さらに踏み込んで、聖徳太子の複合的由緒と類似の伝承が、チンギス・ハーンに由緒の中で成立していたことを見てみたい。

モンゴルに最初に仏教が伝わったのは、文献上では一二四七年とされる。チベットの大学匠のサキヤパンデイタはチベットを越えて蘭州に赴き、チンギス・ハーンの子孫のゴデンにチベット仏教をもたらしした。以後、モンゴル帝国の宮廷を中心に仏教が弘まり、経典のモンゴル語訳も始まった。

仏教以前のモンゴルを伝えるのは、十三世紀に成立したモンゴル最古の文献『モンゴル秘史』である。同書は、神話的先祖からその死に至るまで、ほぼ全編に亘ってチンギス・ハーンの一二代記を活写している。神話・伝説と史実が混在することや、最古の文献である

ことから、『モンゴル秘史』は日本の『古事記』と同様の位置づけができる。ただし、『古事記』には仏教伝来の記述があるのに対し、『モンゴル秘史』はそれについて触れることがない。

一方、一七世紀に成立した『アルタン・トプチ(黄金の要説)』や『エルデニーン・トプチ(蒙古源流)』は、仏教の思想に基づき記述されたモンゴル語の史書である。両書ではチンギス・ハーン

の由緒に関して大きな違いがある。端的に言えば、『モンゴル秘史』は民族古来の伝承に基づく伝統的なチンギス・ハーン像を伝え、『アルタン・トプチ』はインド・チベット系の思想である仏教により捉えられたチンギス・ハーン像を描いている。それはあたかも『古事記』における聖徳太子と、平安期以降の『聖徳太子傳』などに見える後世の仏教的太子信仰との相違のようである。

『モンゴル秘史』によれば、チンギス・ハーン(当時の呼称はチンギス・カン)の先祖は天より降った「灰褐色の狼」とされる。この狼は明の漢人と推定される人物により「蒼狼」と誤訳されたため、日本などでは広く「蒼き狼」として知られている。井上靖の小説『蒼き狼』はその典型である。『モンゴル秘史』は続いて、この狼が生白き雌鹿と結婚し、そこからチンギスに至るまで代々の子孫を増やしていったことを述べていく。天降つた者、天神の子孫がこの世の支配者になる神話は天孫降臨型神話と分類され、夙に神話学者の三品彰英は日本神話もこの範疇であると論じていた(『日本神話論』平凡社、一九七〇年)。しかし、日本の天皇の神話的先祖に動物は登場せず、その点でモンゴルの獣祖型神話とは一致しない。『モンゴル秘

史』は狼と鹿の二十三代目の子孫をチンギス・ハーンとする。こうした記述は『旧約聖書』や『古事記』にも見られる系図型神話である。『アルタン・トプチ』は、『モンゴル秘史』の記述のほぼ八割を踏襲しつつ、あらたに仏教的世界観によりチンギス・ハーンの起源を塗り替えた。ここではチンギス・ハーンがインドにまで遡及される。その記述を要約してみよう。

『アルタン・トプチ』はインドの歴史記述から始める。インド最初の王はブツダに起源を有するマハーサンマタ王で、その王に奇形を持つ子が生まれたため、箱に入れてガンジス河に捨てた。その箱がヒマラヤを越えてチベットに流れ着き、地元の民に拾われてチベット最初の王ニヤティエンポ王



モンゴルの僧侶が天地の神を祀る石の堆積物を供養する様子を描く現代の絵画。筆者蔵。



山内各所のお大師様を巡拝した



大師堂前にて先達と共に

十月十二日、高尾山内八十八大師巡拝が行われ、雨天にも関わらず総勢二十三名の方々が参加され、お大師様との御縁を結ばれました。巡拝では霊気満ちるがごとく霧漂う道中を進み、先達の僧侶と共に蛇滝周辺から薬王院までの各お大師様の御宝前で法楽をあげました。山上に到着し、大本堂にて御護摩修行に参加された後、大師堂周辺の八十八大師御砂踏み霊場を巡りました。精進料理の昼食後には、一号路を下りながら道中の各お大師様を巡拝して不動院に到着。その後は不動院にて、巡拝の成満を御本尊様に奉告する献灯式が、佐藤山主御導師のもと行われました。

# 高尾山内八十八大師巡拝

十月十二日(火)

清秋の高尾山で修行を実践

# 第百十八回 信徒峰中修行会

十月九日(土)



山麓で行われた柴燈大護摩供



気合を込めて滝行を修す



一文字一文字を大切に写経を行う



険しい山中を練行する



宿坊前にて佐藤山主と記念撮影をする修行会参加の皆様

子供の頃親しんだ昆虫図鑑に、カブトやクワガタ以外にツノを有する甲虫がいることを知り、とても興味をそそられた記憶があります。ダイコクコガネやツノコガネらは別にして、ゴミムシダマシの仲間の中にも奇抜なツノ状突起を持つ種がいて、まるで角竜トリケラトプスのようなコブスジツノゴミムシダマシ、そしてその前後にカブトゴミムシダマシ、クワガタゴミムシダマシが図示されていて、子供心に「へえ、ゴミムシダマシの中にも兜や鍬形の名がつく種がいるんだ」と驚いたものです。

高尾山には前記のコブスジツノゴミムシダマシ、ニセコブスジツノゴミムシダマシ、カブトゴミムシダマシが生息していますが、クワガタゴミムシダマシは未発見でした。

クワガタゴミムシダマシはこの仲間の中では大型種ですが、クワガタと名付けるにはやや地味な雰囲気、特に上から見た場合特徴がよく掴めません。それでも前方から見上げると、なるほど鍬形っぽいなど感じる程度です。

私は高尾山で本種に出会ったことがなく、採集報告があっても他種の誤認であることも多いですが、実際に採集されたという話も聞きます。高尾山についてもおかしなく、いて欲しいと感じる種ではありません。

(撮影・文松島 孝)

## 高尾山の昆虫

### クワガタゴミムシダマシ

145



# 高尾山年代記

23

## 歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

### 十三世賢俊 普門寺の中興

元禄五年（二六九二）三月二日、この日は宗祖弘法大師空海の御影供の日だが、同日に伝法灌頂の儀式が執行されていた。高尾山薬王院二世世堯永が賢俊に授けた印信（伝法の証書）が薬王院文書に伝来している。

一三世賢俊の晋山  
印信の中には末尾に「これすなわち最究竟本源、しこうして祖師代々皆病床におよび終克に臨み授けるところなり」とあるいは「口授のほか、残す所一塵無し」と記されているものがある。末期にあつて後事を託す、最後の師資相承の儀式であることを示している。印信の文言としては決まり文句ではあるのだが、

堯永の命日とされるのはこの年の七月二〇日、自らの余命僅かを悟つての伝法灌頂であつたことになる。過去帳によると享年七〇歳。

跡を承けた賢俊は「過去帳」の享年から逆算して五六歳と、当時としては晩年と言つてよい頃である。門末の蓮乘院八世からの転身であつた。元禄八年（二六九五）付で提出した色衣免許願書には、京都の智積院へ六ヶ年の留学が記されている。さて、その色衣の着用については同年十一月二日付で新義真言宗触頭の江戸四箇寺から回状が発せられ、希望する僧侶は所在地・本寺・寺の来歴・住山の年数などを書き上げ届け出よとしていた。

この時は田舎本寺（地方本寺）格、將軍への拝謁にあつて独礼の格式にあることなどを基準として浅黄色・香色の二種が認められている。なお、現在も衣の色は僧階によつて定められているが、當時とは宗派の組織も変わり、位階付与の状況も相違いがある。

この時、「寺之起立」の記事を求められたことから、開山・中興と法流に関する覚え書が作成されている。行基菩薩を開山とし、永和元乙卯年の俊源による中興開山を記す管見のところ最も早い時期の文面である。醍醐松橋慈心院においては俊源の事績ということだろうが、典拠として「明德四年血脈にあり」と記されている。永和元年と元禄九年ではあまりに時代が開き過ぎていたが、明徳四年（二二九三）とすると、わずか一八年後のことである。その記事を元にしているならば信

憑性はかなり高いこととなるが、残念ながら、この明徳四年の血脈は薬王院文書の中には確認されていない。将来、その所在が判明する日があるのかもしれない。

### 普門寺の末寺昇格と津久井方面の門末寺院

賢俊の事績としては普門寺の末寺昇格を挙げることが出来る。薬王院のような田舎本寺の下の序列があり、末寺は総本山の法流を相承し祭儀の執行権を有する。元禄二年（二七九八）四月二八日、普門寺及び薬王院門末連印、薬王院賢俊の奥判により江戸四箇寺に対し普門寺の末寺昇格の願いが出されている。翌月には認可を得、五月二八日に普門寺住持頼真に対する伝法灌頂が執行された。徳川幕府の官撰地誌『新編相模風土記稿』（二八四二年成立）が頼真を普門寺中興とする所以は、この末寺格への昇格によ

るとされるが、同時に津久井方面の門末体制を整備・確定した功績が指摘できるだろう。

門末の筆頭格として最初の末寺昇格を果たした普門寺は、相模国津久井県中沢村（相模原市緑区の旧城山町地区・津久井湖の北岸）に所在する。「風土記稿」には天平年中（七二九〜七四九）の起立とあり、鱒口や板碑など鎌倉・室町期の文化財を有する古刹である。慶安元年（二六四八）に將軍徳川家光から二七石七斗余の朱印地を領知されており、これは門末中で最も大きな朱印高である。背後の山に飯縄宮を祭祀し、東方の相模原市橋本周辺に分布する法類寺院が平地の寺院なのに対し、山間地域への立地という点で、祭祀なども本寺薬王院に相似した形態が指摘されている。この津久井地区には東福寺、慈眼寺、滝清寺の門末寺院が集中しており、何れも普門寺との関わり

が深い。滝清寺は普門寺の門徒であつたが、元禄一五年の書面に「先年本末お改めの節は潰れ」の状態だつたが、「三年已然より取り立て住持申し

### 傳法灌頂阿闍梨職任事

昔々如來開悲胎藏金剛秘密兩部會授金剛薩埵數百歲之後授龍猛菩薩如是金剛秘密大悲胎藏之道近吾祖師根本阿闍梨亦於法大師既八葉今至愚身第四十二代傳授次弟師法益脈相承明鏡也小僧數年之間盡承法誠業隨法師法印受具支灌頂秘奧受法印賢俊後深信三密具肯久學于兩部大法今緣相催而授傳法灌頂密印也今後阿闍梨亦示後指而授之能況五塵之染可期入慧之運是則融佛恩念師德喜願此不可餘念

元禄五年三月廿一日

傳授阿闍梨法印堯永

賢俊後

十二世堯永が十三世賢俊に授けた印信（伝法の証書）  
法政大学多摩図書館寄託

とし、東福寺を普門寺の支配（薬王院からは又門徒ということになる）とする願い書にある。東福寺は飯縄宮の祭祀にも関与していたが、何らかの事情で薬王院直支配となつていたが、普門寺の寺領内に立地していたというので、元来、普門寺の配下であつたと推測される。慈眼寺も当初薬王院の直支配だつたが、一二世堯永の時（二六五五〜二六九二）に焼亡したものを、近隣の普門寺が再興した。その支配は江戸四箇寺の裁定で、本寺を薬王院としつつも普門寺が支配を認められている。頼真は貞享五年（元禄元年・一六八八）に普門寺住持となつていたが、その在世中に近隣三ヶ寺との関係を確立したことになる。

### 山主の交代

元禄二年（二六九九）八月七日、賢俊が導師となり後の薬王院一四世秀永に対する伝法灌頂が執行された。先の堯永が賢

俊に授けた印信と同じく末期の時である文言が付されてあり、どうやら病床にあつて山主の交代を進めたものと考えられる。天保四年（二八三三）の由緒書は、賢俊示寂の年を宝永五年（一七〇八）とし、その年までの在任一七年としていたが、実際には違つたようだが、元禄一五年付の文書に「高尾山薬王院秀永法印」の署名があり、同年付の別の文書にも端裏書だが（後年の注記の可能性があり、やや確度は落ちる）「秀永代」と記されている。当時において「薬王院」という表現は住持その人を示す意味で用いられていたもので、元禄一五年段階で秀永が山主の座にあつたことは間違いない。したがって、元禄二二年の伝法灌頂を山主交代にともなうものとすれば、賢俊の在任は実質六年半弱ということになる。隠居した賢俊は、天保の由緒書の寂年が正しいとすれば、なお

十年近く余命を保つたことになる。宝永五年示寂、七二歳。

※1 寺社奉行の配下として寺社行政を司る愛宕真福寺ほかの寺院。

※2 田舎本寺クラスは惣独礼と言つて数ヶ寺が同時に拝謁した。

※3 浅葱色薄い青を浅黄色と表記する場合がある。香色はごく薄い茶色。

《参考文献》真上隆俊『高尾山の歴史―薬王院の門末とその住僧―』（多摩文化第二号武州一九七四）猪秀敏編著『高尾山薬王院歴代先師年譜』（大木山高尾山薬王院、二〇二〇）

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。八月号で門末寺院の末寺格への昇格を正徳年間（二七二〜二七二六）以降、江戸中期としましたが、普門寺を除く六ヶ寺がその時期の昇格となります。



俊源大徳様の御遺徳を偲ぶ



御奉納頂いた掛衣を着ける  
佐藤山主と阿久津様

去る十月四日、高尾山中興第一世・俊源大徳様の御遺徳を偲ぶ中興俊源大徳忌を、四天王門脇の俊源大徳像前にて執り行いました。

俊源大徳様は永和年間（二三五七〜三三七九）に京都醍醐山より高尾山に入山して、八千枚の御護摩供を修法された後、現在高尾山御本尊としてお祀りされている飯縄大権現様を勧請し、当時荒廃していた薬王院を中興されました。

当日は平成十二年に、修験道開祖・神変大菩薩千三百年御遠忌記念として、俊源大徳像を御奉納頂きました阿久津隆弘様が御来山となり、共に祈りを捧げられました。

また、佐藤山主が中興第三十三世として昨年入山されたことを記念し、阿久津様より緋色の掛衣を奉納頂きました。

阿久津様には厚く御礼申し上げます。

# 中興俊源大徳忌法要勤修

十月四日(月)



佐藤山主と共に境内各所を巡る

十月五日、高尾山慶賛会の研修会として「高尾山に親しむ会」が開催されました。この研修会では高尾山の歴史や文化を紹介することで、高尾山との御縁を更に深めて頂く趣旨のもと行われ、およそ六十名の方々に御参加頂きました。

当日はケーブルカー山上の高尾山駅から出発し、普段は公開されていない、有喜苑仏舎利塔内部の参拝など境内各所を、佐藤山主自らご案内されました。

続いて大本堂において法話を聴聞し、御護摩修行に参列されました後、精進料理を頂きながら、会員同士の交流を深められました。

# 高尾山慶賛会研修会 「高尾山に親しむ会」開催

十月五日(火)

# 三社寺合同

災害復興  
疫病退散

# 祈願祭厳修

九月二十七日(月)

去る九月二十七日、北口本宮富士浅間神社と大山阿夫利神社、高尾山薬王院の三社寺は、全国災害復興と疫病退散を祈る合同祈願祭を執り行いました。

この祈願祭は、東日本大震災慰霊祭を三社寺合同で行ったことを契機として、今では日本各地で発生した様々な災害の復興を祈るため、一年毎に三社寺の輪番で行っております。本年は感染症対策のため、屋外の山麓自動車祈禱殿広場にて、柴燈大護摩供を厳修致しました。

東日本大震災発生から十年を迎える本年、大山阿夫利神社からは目黒宮司、北口本宮富士浅間神社からは田邊禰宜を始めとした神職の皆様が参列され、当山佐藤山主大祇師のもと、復興への祈りと新型コロナウイルス感染症終息への願いを共に一心に祈念致しました。



災害復興と疫病退散を祈る柴燈大護摩供



山主を囲み三社寺一同での記念撮影  
前列左・大山阿夫利神社 目黒宮司  
前列右・北口本宮富士浅間神社 田邊禰宜

# 祝創立百周年 高尾登山電鉄株式会社 記念参拝

去る九月二十九日、本年度創立百周年を迎えられた高尾登山電鉄株式会社から、船江栄次社長をはじめとし、社員の皆様が御参拝に訪れました。

高尾登山電鉄は大正十年（一九二二）に設立され、今ではケーブルカーやリフト事業以外にも、さる園・野草園、また土産物販売や食堂など、高尾山観光では欠かせない存在です。

これからも、御参拝やハイキングに訪れる方々を大勢お迎えして頂き、貴社益々の発展と、社員皆様のご健康をお祈り申し上げます。



船江社長（前列中央）と社員の皆様

# いけばなの心 21

華道教授 佐藤 宗明

いよいよ今年も年末が見えてきました。山は色付き、天気の良い日は紅葉狩りも楽しいと思います。

今回ご紹介する作品は、冬に向かい枯れゆく中で彩りを見せる紅葉を想い、生けた生花新風体です。また、気持ち落ち着くだけではなく、スツキリと澄んで広がる青空を見る時のような気持ちもあわせて感じて頂きたいと思つて、構成してみました。そのため、あわせにくい花材の扱いとなりましたが、株を二つに分ける株分という形にすることで、違った雰囲気の花材を無理なく扱う事が可能になります。

左側にパピルス、右側に紅葉した薄を並べて、勢いよく立ち上げて生けてみました。見る人に秋の雰囲気を感じて頂きつつも、爽快な気持ちになつてもらいたいと言ふ気持ちで生けています。水際には雰囲気崩さないように、派手過ぎない色合いのパフィオという蘭を添えています。



花材：パピルス（シベラス）、薄（尾花）、パフィオ（蘭）

十一月は中旬にもなると、七十二候で言えば『地始凍（ちはじめてこおる）』とも言われ、冬の訪れを感じさせる時期になります。まだ、霜柱は立っていませんが、土の上を歩く時にサクサクと音が鳴ると冬の楽しさを感じます。ただ、関東地方では寒く乾燥していくことで、体調を崩しやすい時期でもあります。皆様体調には、お気をつけください。

## 高尾山 修行場めぐり

8

### 願叶輪潜

四天王門を通り境内に入ると、大天狗像・小天狗像の向かい側に、「願叶輪潜」という、人が通れる大きさで石造りの輪があります。

この願叶輪潜では、諸々の願いが叶いますようにと念じながら、御本尊様の智慧の輪を意味する「輪」を潜ります。

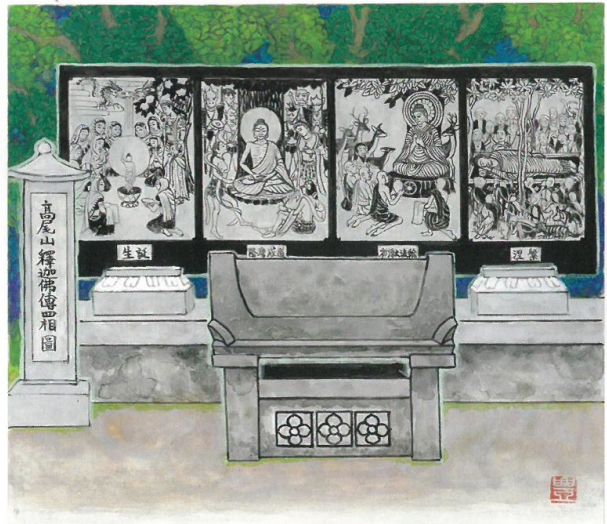
続いて、輪の先にある大錫杖を鳴らしながら、更なる諸願成就を御本尊様にご祈念ください。



# 高尾山物語 43

## 釈尊仏伝四相図

絵・橋本豊治



### お釈迦様最後の説法

お釈迦様は弟子達に次のように説いた、「嘆き悲しむのはやめなさい。生あるものはやがて滅する。自分の心を信じて真実の教えに従い生きる事が、私と共に生きる事である。怠ることなく精進しなさい。」

有喜苑には、高尾山釈尊仏伝四相図が建立されており、お釈迦様の生誕から涅槃に至る四つのお姿が彫られております。

### 生誕

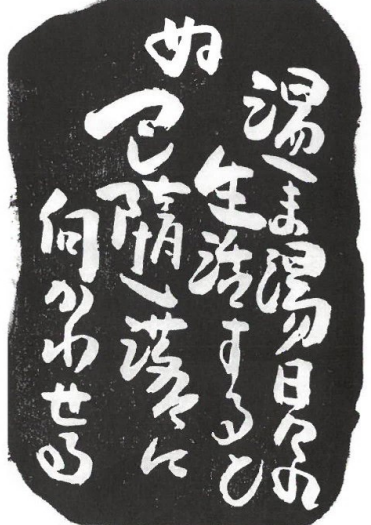
お釈迦様は誕生された時、右手で天を、左手で地を指し「天上天下唯我独尊」と宣言されました。降魔成道

お釈迦様が悟りを開かれることを警戒した悪魔が瞑想を妨害したが、ついに悟りを開き仏陀（目覚めし人）となられた。初転法輪

悟りを開かれたお釈迦様が、以前苦行を共にした修行僧に教えを説き、偏りのない正しい心を持つよう説かれた、仏陀としての初めての説法。涅槃

沙羅双樹のもとに頭を北に向け横になり、取り囲む弟子達に最後の説法を行い入滅された。入滅の際には弟子や動物たちが悲嘆にくれた。

## いろは 天狗の落し文 10



### ぬ 湯 ま湯 日々生活すると 己墮落に向かわせる

「ぬるま湯」に浸かる。元々は単にお湯の温度の意味する言葉でしたが、現在では、居心地が良いのだが、何事もおろそかな状態となり墮落している、という意味を持つ言葉にもなっています。安定した状態は気持ち良いものです、しかし、かつて目指した理想や目標を忘れてしまい、怠惰になつてしまつては残念なことです。時にぬるま湯から飛び出して自分を磨く、その気持ちを忘れないでいたいものです。



# 令和四年 正月期間御護摩修行の流れとお願い

## 当山の感染症防止対策について



- 【感染防止の基本】**
- ・ 大本堂、各部署は常時換気を徹底しています
  - ・ 境内各所は定期巡回を行い、消毒を実施致します
  - ・ 消毒液の設置(手指の消毒にご協力をお願いします)
  - ・ 事前の検温とマスク着用の徹底をお願いします
  - ・ 体調が優れない時には外出をお控え下さい

**【大本堂内での対策】**

- ・ 靴袋をご持参下さい
- ・ 堂内での私語はお控え下さい
- ・ 堂内への入場は三百名までと制限します

**【坊入りについて】**

・ 例年、七日まで行っている新年の御挨拶(おとそ膳)は本年も中止と致します

**【御護摩受付所・信徒休憩所】**

- ・ 信徒休憩所は使用中と致します
- ・ 御朱印及び健康登山押印は信徒休憩所にて授与致します

※御参拝の皆様には、検温、マスク着用、消毒等感染予防を行い、体調に留意の上御来山下さいます  
 ようお願い申し上げます

※御参拝できない方には郵送にて、御護摩札、縁起物、御守り等を授与致します

御信徒の皆様にはご不便をお掛け致しますが、何卒御理解と御協力の程、宜しく申し上げます  
 御質問等御座いましたら高尾山薬王院信徒部までご連絡をお願い致します  
 尚、今後の感染状況により、対策等が変更になる場合があります

高尾山薬王院信徒部 TEL〇四二一六六一一一一五



### 星まつり祈禱のおすすめ

星まつりとは、毎年  
 順を追って巡りくる九  
 星にお祈りして、災厄  
 を除き福運を招くご  
 祈禱です。



高尾山では、冬至に  
 星まつり特別大護摩供  
 を厳修して、御信徒  
 各位の諸願成就を祈  
 念しております。

又、当山の星まつり  
 の御札は飯縄大権現、  
 薬師如来、不動明王の三尊を始め、殊に九星、十二宮、  
 二十八宿等の諸々の曜星を網羅した星曼陀羅を内符  
 として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、广大無  
 辺のご加護に浴せられますようお願い致します。

※年齢は来年の数え年(来年の満年齢に二歳加える)  
 ご祈禱料は一人様千円。特別祈禱料は二千円以  
 上となります。申し込み締め切りは十二月八日、冬  
 至の祈禱終了後、お札を郵送致します。

祈禱申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾  
 山の寶曆、振込用紙一式をお送りいたします。

**時間変更の御案内**

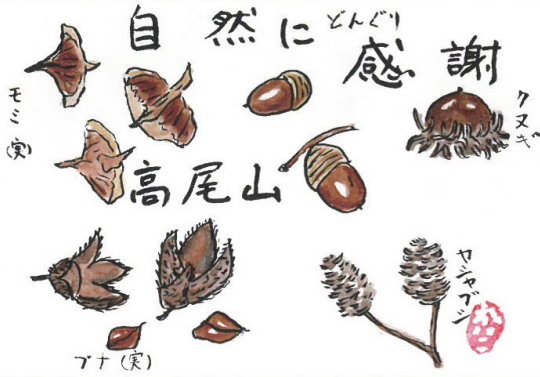
本年より星まつり祈禱会開白(十二月二十二日)の  
 時間を例年より早めて、午後三時より執行致します。  
 御祈禱に参加された後には、高尾山頂より望む  
 富士山に夕日が沈む、「ダイヤモンド富士」の神秘的  
 な姿をご覧になってはいかがでしょうか。

○ 木曜星 大吉運	● 月曜星 半吉運	● 計都星 凶運	● 火曜星 凶運	○ 日曜星 大吉運	● 金曜星 半吉運	○ 水曜星 大吉運	● 土曜星 半吉運	● 羅喉星 凶運
此の星に当る人は除災招福の象にして万事好都合に運ぶなど細心の注意を欠くと損失あり目下下の意見を聞き性を慎むべし	此の星に当る人は進展の象なれど過ぎたるはなお及ばざるが如しにして余り過ぎるは災いの基である信心怠らず精進すべし	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多し損失難別病災などに悩む信仰厚ければ除災光明を得る	此の星に当る人は疲労困憊の象にして災厄病難等に注意すべし信心して堅忍自重を要す	此の星に当る人は盛運にして万事順調に運ぶ象なれども慢心すれば大吉反して凶となる信心して加護を得べし	此の星に当る人は運勢除るの象にして黒き雲の為に清き月の光も隠る、如く何かと障りあり口舌争論傷害等用心すべし	此の星に当る人は幸運の象にして善業積めば目上の引立亦意外な利得あり口舌傷害などに注意すべし	此の星に当る人は運勢漸く開くの象にして諸事準備なさらば花綻ぶが如くなれど怠らば災害事憂あり	此の星に当る人は運勢潜む象にして諸事慎まざれば災難あり家内他人に口舌事多しなお病難に注意を要す信心堅固にして慎むべし
四 緑	三 碧	二 黒	一 白	九 紫	八 白	七 赤	六 白	五 黄
平成26年生 9	平成27年生 8	平成28年生 7	平成29年生 6	平成30年生 5	令和元年生 4	令和2年生 3	令和3年生 2	令和4年生 1
平成17年生 18	平成18年生 17	平成19年生 16	平成20年生 15	平成21年生 14	平成22年生 13	平成23年生 12	平成24年生 11	平成25年生 10
平成8年生 27	平成9年生 26	平成10年生 25	平成11年生 24	平成12年生 23	平成13年生 22	平成14年生 21	平成15年生 20	平成16年生 19
昭和62年生 36	昭和63年生 35	昭和64年生 34	昭和65年生 33	昭和66年生 32	昭和67年生 31	昭和68年生 30	昭和69年生 29	昭和70年生 28
昭和53年生 45	昭和54年生 44	昭和55年生 43	昭和56年生 42	昭和57年生 41	昭和58年生 40	昭和59年生 39	昭和60年生 38	昭和61年生 37
昭和44年生 54	昭和45年生 53	昭和46年生 52	昭和47年生 51	昭和48年生 50	昭和49年生 49	昭和50年生 48	昭和51年生 47	昭和52年生 46
昭和35年生 63	昭和36年生 62	昭和37年生 61	昭和38年生 60	昭和39年生 59	昭和40年生 58	昭和41年生 57	昭和42年生 56	昭和43年生 55
昭和26年生 72	昭和27年生 71	昭和28年生 70	昭和29年生 69	昭和30年生 68	昭和31年生 67	昭和32年生 66	昭和33年生 65	昭和34年生 64
昭和17年生 81	昭和18年生 80	昭和19年生 79	昭和20年生 78	昭和21年生 77	昭和22年生 76	昭和23年生 75	昭和24年生 74	昭和25年生 73
昭和8年生 90	昭和9年生 89	昭和10年生 88	昭和11年生 87	昭和12年生 86	昭和13年生 85	昭和14年生 84	昭和15年生 83	昭和16年生 82
大正13年生 99	大正14年生 98	昭和元年生 97	昭和2年生 96	昭和3年生 95	昭和4年生 94	昭和5年生 93	昭和6年生 92	昭和7年生 91
大正4年生 108	大正5年生 107	大正6年生 106	大正7年生 105	大正8年生 104	大正9年生 103	大正10年生 102	大正11年生 101	大正12年生 100

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙「自然に感謝」

八王子市 梶谷玲子 様



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

自分らしさを貫いて生きる

誰かの指示に従ったり、前例を踏襲し続けることは楽に感じるかもしれませんが、そのうち行き詰まり、息苦しくなることもあるでしょう。自分らしさを貫くとは、前例を学び、自分が一番やりやすい方法に変えていくことではないでしょうか。

高尾山 季節散歩

暦の言葉 「七十二候」 朔風払葉

朔風とは北風のこと、冷たい北風が枯れ葉を吹き飛ばす時期を意味します。木から枯れ葉が飛び舞う様子は、「木の葉雨」や「木の葉時雨」とも呼ばれております。

今月の風物詩 秋の七草

秋に咲く草花の中で、秋を代表するものとされる秋、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、桔梗が秋の七草です。無病息災を願って食べて楽しむ春の七草とは異なり、秋の七草はその美しさを鑑賞して楽しむものとされております。

Table with 2 columns: Donor names and locations. Includes names like 高尾山報助成金志納者, 御芳名(順不同・敬称略), and various city names like 八王子市, 練馬区, etc.

おはなし散歩 冬じたく

町田市 大澤桃代

秋の日暮れは早い。オレは峠を駆ける。急がないと、米子さんが待ってる。高速道路の灯りに見とれていたら、いつしか夕方になっていた。オレは村に残った最後のタヌキだ。米子さんは「タヌ公」と呼ぶ。米子さんとは長い付き合いだ。米子さんの夫、茂さんが亡くなった後、暮らした。それからオレは餌を買っている。餌は残飯なんかじゃなく、米子さんは自分と同じ食べ物を与える。それだけじゃない、芋や玉蜀黍もオレのために用意してくれる。真つ暗な峠を下り、畦道に行く。米子さんの田んぼには稲の根元が行儀よく並んでいる。村には何年も放つてある田んぼが多い。村を離れる人が

きりした家だ。おや？ 軒下いつぱいに下げていた玉ねぎと椎茸がない。雨の様子はないし、元々干しつばなしにしている場所だ。昨日は確かにあったけど、乾いたから家に入れたのかもしれない。雪が降るのかもしれない。この家も冬支度だ。米子さんは物知りだから、支度も早い。作物のこと、生き物のこと、天気のこと、何でも知っている。村長さんも聞きに来るくらいだ。茂さんの残した「作業日誌」に書いてあると、米子さんは言った。「タヌ公、気になるか？」 軒下を見上げていたら、米子さんが言った。「玉ねぎと椎茸は家の中に入れてんだよ」 クウーン、とオレは少し甘えて返事をする。あのな……米子さんが何か言いかけたとき、裏庭がバツと明るくなった。それから、すぐに車の音がして、庭先に止まる。誰か来たようだ。



来たのか、と米子さんは立ち上がり、ちつと待つてな、とオレを見た。胸騒ぎがした。米子さんが勝手口から玄関に回ったから、オレもこっそり覗きに行く。米子さんの娘だった。年に何回かここに来ている。「私も悲しいんだから」二人はそんな話をしながら家に入る。オレはあわてて裏庭へと走る。このまま帰ろうか、と思う。でも、できない。待つてな、と米子さんが言ったのだから。しばらくして、勝手口が開いた。オレは薪棚から動けない。米子さんがオレを呼ぶ。「……タヌ公」って。オレは仕方なくそばに行く。「実はな……」オレは続きを聞きたくなくて、クウーンと鳴く。村が好きで、茂さんの墓を守って、「幸せだ」って言うたのに。「タヌ公いままでありがどうな。明日娘夫婦とこへ行くんだよ。この腰じゃ野良仕事は無理だ」わかつた、腰を痛めたときから。玄関の段ボールを見たときから。米子さんがオレの顔や体をめっちゃめっちゃでてくれた。(元) (挿し絵・小出 茂)



# 登山だより

## 十二月行事日程

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

十一日、二十三日

弁天様御縁日

四日

月例写経会

(十三時山麓不動院)

六日

御詠歌勉強会

(十時山麓不動院)

八日

釈尊成道会(仏舍利塔)

十三日

山内大掃除

十八日

おみがき

十九日

納札供養柴燈大護摩供  
(十三時祈禱殿広場)

二十一日～二十二日

星まつり祈禱会

二十一日 午後三時開白

二十二日 午前六時結願

※本年より開白の時間を  
変更致しました。

二十二日

飯繩様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

二十八日

奥之院開扉供養(十時奥之院)

三十一日

大晦日・二年参り

★お知らせ

十二月十三日は「山内大掃除」、十八日は「おみがき」の為、午前中の御護摩修行は時間と場所を変更する場合がありますので、御了承下さい。

## 毎日の お護摩奉修時間

(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分

// 9時30分

// 11時00分

午後0時30分

// 2時00分

// 3時30分

ご講中・団体等御相談  
下さい。

## 新春特別開帳大護摩供

# 元旦御護摩札

# 申し込み御案内

令和四年元旦、午前零時より高尾山では、元旦特別開帳大護摩供修行が厳修されます。御信徒の皆様には、元旦に参拝されて、大本堂で執り行われるこの修行に参加されることを、お勧めしております。

また、御信徒様各位の都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に、元旦御護摩札を郵送でのお取り扱いをいたしております。

元旦御護摩札のお申込みを御希望される方は、高尾山信徒課まで御連絡頂きますと、申込用紙をお送りいたします。同封されている返信用封筒に、元旦御護摩申込用紙を同封頂き、十二月十日までに必着するようにご投函頂きますよう、お願い申し上げます。

尚、元旦御護摩札の発送は、一月三日以降を予定しております。

## 申し込み締め切り

十二月十日必着

## お問い合わせ先

電話 ○四二一六六一・二一五

FAX ○四二一六六四・二九九

高尾山薬王院・元旦御護摩係まで

## インターネットでの 申し込み受付について

当山では、御護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送を、お受けしております。

手紙、FAX等での申し込みを、お願いしておりますが、インターネットの「高尾山薬王院公式ホームページ」(左記参照)の「お護摩祈禱のご案内」から直接申し込みをすることも出来ますので、是非ご利用頂きますよう、お願い申し上げます。

## 休載のお知らせ

高尾山の展示物を紹介する「院内散歩」は、都合により今月号の掲載を、休載とさせて頂きます。

高尾山薬王院ホームページ  
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所  
東京都八王子市高尾町2177  
大本山  
高尾山薬王院  
郵便番号 193-8686  
電話(042)-661-1115(代)  
FAX(042)-664-1199  
発行人 菅谷秀文  
編集人 菅井倫浩  
印刷 ヒラツカ印刷社  
毎月1回1日発行  
1部50円